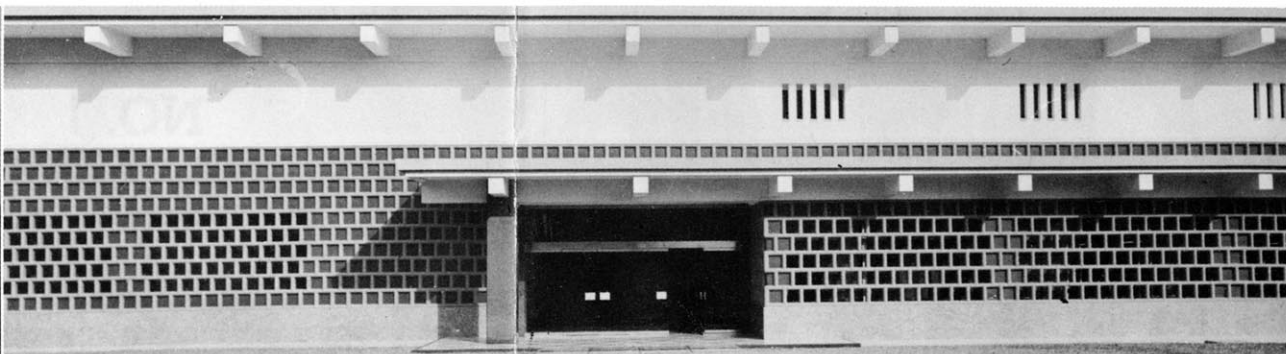




館長 矢代幸雄



美のための美術館

大和文華館々長 矢代幸雄

私は生涯の大部分を各国の美術館で過ごしてきた者です。日本ばかりでなく、パリのルーブルにも、イタリア・フィレンツェのウフィチにも、或はロンドンのナショナルギャラリーやブリティッシュミュージアム、また、アメリカ各地にある大美術館にも、幾日も、否、時によっては幾ヶ月も通いました。しかし、これら名品でいっぱいの大美術館に於ても、私は半日もそこで見物や研究をしていると、疲れてしまうのです。つまり、何だか息苦しくなって、私の様な美術好きの者でも、心が不感症に陥って、最も大切な美というものを感じなくなってしまうのです。

これは何故か、というと、美術というものは、先ず眼をもって見るものに相違ありませんが、その美術の人間価値である美というものは、眼を通じて人間の心というもので感じ受け、そこで人間の精神を養う糧とするものだからであります。それ故に、美術を見て、その美を心をもって味わい、それを精神の糧とするという消化作用を起こさせるには、人間の身体それ自身もまた快適なる状態に保たなければなりません。それには、私の経験や観察によれば、美術館は先ず快適なる環境に置かれなければならない、と考えるのであります。さもなければ、美術館は美術品の単なる倉庫、或はもしかすると、美術品の牢獄になってしまうのです。

そうなつては困るので、それを救うためには、どうすればよいかという問題になりますが、私の考えでは、日本の様な好適なる気候風土の国に於ては、先ず美術館を出来るだけ自然の美しい所を選んで建て、そして、美術品の内外を自然美及び自然なる状態より出来るだけ遮断しない様にする事が、最も必要ではなからうかと考えられるのであります。自然美を見、また戸外の良い空気を吸って、自身

の身体を先ずもって新鮮快適にし、それでもう一度美術品を見れば、よい美術品の美が新鮮によみがえって、心に深く感ぜられるのであります。つまり言うなれば、美術の文化美を自然美の額縁に於て眺める時、美は最も我々の心の内に、深く、生き生きとして入ってくるのであります。

私は大和文華館に於ては、美術館としての全ての工夫をその点に集中して、考え、設備し、運営しているのであります。例えば、陳列品を見て、もし、疲れれば、バルコニーに出て池の上を吹いて来る新鮮なる空気を呼吸し、疲れた眼を休めます。池の向うには春日山が霞んでみえます。眼が疲れた時、遠くの景色を眺めるくらい、眼が休まることはありません。更にまた私は、自然美の一部が、ギャラリーの中までもなだれこんだ様にしたいと思って、陳列廊の中央に中庭を造り、そこに孟宗竹を植えたのであります。このギャラリーの中央にある竹藪の緑色の葉の動きや、竹幹の見事な緑色が、どのくらい陳列廊全体に自由な空気と余裕感とを与えているか、解らないほど、よく効いていると思われます。それで、大和文華館は、「中庭に竹が植えてある美術館」として世界によく知れるようになりました。

斯くして大和文華館は、美術の最も重要な人間価値であるところの美なるものを、最も気持ちよく心に味わい得るために構想され、また設計設備され、運営されている美術館であります。来館者の皆様は、どうかこのおつもりで、先ずは周囲の自然美を愛し、その自然美の額縁に於て陳列の名品類の文化美を充分味わって、人生を豊富にし、充分それを楽しみ、そしてまた必要なる知識も吸い取っていただきたいと願っております。

季刊 美のたより No.1

昭和42年 4月1日

発行 大和文華館